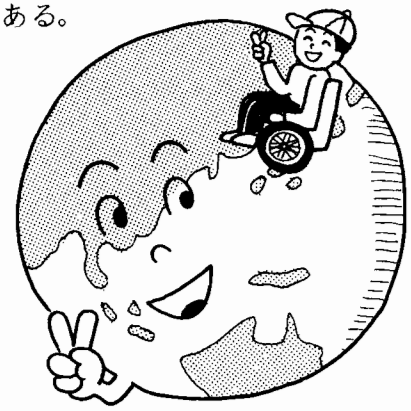
《この本は、絶対読んで！２》

障害者アクセスブック
海外旅行編　　福祉文化学会　監修
草薙威一郎・馬場清　編

自立、就職（仕事）もままならない障害者の方に旅行をすすめる本なんて、非常識うんぬんとご批判を受けそうですが、絶対にそんなことはない！（と声を大きくしていいたい！！）この本を読むと、海外旅行などこれまで考えた事のない人も行ってみようかと思ってしまうのではないでしょうか？また、今すぐには無理でもいつか・・・というような希望を持たせてくれる本です。
序章「旅は『人権』」から以下全４章で構成されています。

◇第一章「障害者海外旅行のススメ」◇
障害者海外旅行のあゆみと現状及び旅行の効用と問題点が紹介されている。
旅の楽しみの一つに人との出会いがある。コミュニケーションの拡大は、その人の生き方にまで影響を及ぼし得る。さらに障害者がさまざまな出来事と出会う事により、肉体的にも精神的にも機能を回復する可能性が示唆されている。そんなにおおげさなことでなくても、旅行に行く前と後とを比較したとき体調そのものが好転しているという場合も少なくない。これは病院の中ではできない機能回復訓練として「ソーシャル・リハビリテーション」、また別のひとには「旅行療法」という言葉で表現されている。社会に住む誰でもが何らかの形で障害者の機能回復に寄与することができる新たなリハビリテーションとしての旅行も提唱されている。
その一方、障害者故の問題点も多々あり、障害別にさまざまな条件の整備が必要とされている。肢体障害で電動車椅子を使用する場合、航空会社によりバッテリーが危険物と扱われることがある。また、上肢障害の場合、サインができないことから同行者に代筆を依頼する等の処置が必要になる。視覚障害の場合も移動・署名が問題になる。聴覚障害の場合、緊急時・予定変更時に放送等の連絡では対応が遅れてしまう等の問題がある。
さらに今後の障害者旅行の展望が考察されていた。高齢化社会が進む中、お年寄りの旅行の増加は必至である。障害者、お年寄り。「利用する最も弱い立場の人に合わせて設計する」ことが快適な旅行をすべての人に保障する。この考えから「モノ」（ホテル・移動交通手段）、「ヒト」（介助者）、「情報」の整備を提唱している。



◇第２章「障害者海外旅行体験記」◇

障害があるから行き易い所へ行っているのではないか？海外でも場所が制限されるのではないか？そんな風に障害者の旅行を考えていた私だったが、これを読んでびっくり！シルクロードやインド等、健常人でも体力が心配になるような所の体験記が次々に書かれている。旅行計画のたて方により、体力が必要な所へ行くのも十分可能になることを知った。問題は旅行する場所ではなく、介助者や障害者自身にある場合も示されており、いろいろ考えさせられた。

また、視覚障害の人が景色を見れず、旅行をして感動があるのか？私は不思議だった。しかし、視覚障害ゆえ、その土地の音、においを敏感に体全体で感じとる。他の障害者も同様、その場所へ旅行しなければ得られない感動・体験をしていると知ってまた納得。

「私も海外旅行に行けたんだ。旅行はこんな楽しいものなんだ。不便で辛いことがあるかもしれないけれど是非みんなにも行ってほしい。障害者当事者が外に出なければ、世の中のしくみを変えることはできない」という想いがひしひし伝わってきた。

さらにいろんな障害を持つ人のそれぞれの立場から今後旅行される人への非常に役立つアドバイスといったものも示されている。

◇第３章「障害者海外旅行Ｑ＆Ａ」◇

これから旅行に出かけようという人のために、計画から渡航手続き、現地事情のノウハウを質問形式で具体的に示している。

◇第４章「障害者海外旅行ガイドブック」◇

ここでは日本人に人気の高い観光地、１１都市をピックアップし、空港・交通、観光地、ホテル、ショッピング、エンターテイメント、レストランについて、スロープ・エレベーター・トイレ・介助可否などの情報を比較的詳細に提供している。ただ、一般の旅行ガイドと合わせて活用することを意図しているらしく、観光ガイドの記述は若干少なくなっている。

障害者向けの海外旅行ガイドは国内では初めてのもので今後の充実が期待される。それには実際に自分で行って見たことを、得た情報を逆に提供していくことが次のよりよいガイドブックにつながっていくのではないだろうか？それが、また自分にも返ってくるはずである。

「この本を片手に海外旅行に飛び立たれる方が一人でも多くいらっしゃいますように」と編集者一同望まれているようだが、私も全く同感。旅行の味を一度覚えてしまったら、やめられない・・・。

筆者自ら、本書は「単なる旅行ガイドブックにとどまらず、人生のガイドブックでもある」と言いきっている自信作となっている。　（Ａ５版、２６５頁、定価２５００円、中央法規出版〔TEL(03)3379-3861〕、１９９２年）